

道徳 ジャーナル

101号(春号)

- 21世紀 心の時代に「稲作技術を海外に 三十二年間で成し得たこと」坪井達史……………1
- 道徳授業 私の実践 複式学級における子どもの学び……………4
- 道徳授業 私の実践 小・中学校で連携して行う道徳授業 幸阪芽吹……………6
- 道徳授業 私の実践 道徳の学びを主体的に発信する中学生の育成 秋山寿彦……………8
- 道徳授業 私の実践 道徳こそ、カリキュラム・マネジメントを生かそう 鈴木賢一……………10
- どうなるこれからの道徳授業……………12

私は、大学時代、食糧問題研究会を立ち上げ、インドで現地調査を行いました。その際、海外技術協力事業団（JICA）国際協力機構の前身）が実施していた稲作プロジェクトで、専門家がインドの人々に稲作技術を教えている様子を見て、国際協力の仕事に憧れを抱き、青年海外協力隊への応募を決めたのです。

私の実家は農家で、大学では農業に関して学んでいたこともあり、一九七五年にフィリピンに青年海外協力隊として赴任し、二年間稲作と野菜栽培を指導しました。その後も陸稲や水田跡地での畑作物栽培を研究しました。一九八一年にJICA稲作専門家としての仕事が始まり、インドネシアのスマトラ島に一年、フィリ

稲作技術を教えるきっかけ

「稲作技術を海外に

三十二年間で成し得たこと」

21世紀
心の時代に

ピンのボホール島に七年滞在。そして一九九二年からアフリカの稲作支援に携わるようになりました。



JICA短期専門家
坪井達史

アフリカの稲作支援の始まり

アフリカの人々の主食はトウモロコシ、キャッサバ、ソルガム、ヤムイモ、コメなどで、近年コメの消費が年六パーセントほど増加しています。しかしアフリカにおけるコメ生産量は消費量の六割ほどで、不足分は輸入に頼り貴重な外貨を使っている状況です。アフリカ大陸には稲作適地が多くありますが、農業を指導する普及員は稲作の知識・経験が乏しく、稲の研究者もほとんどいません。そこで日本は、八十年代からアフリカの稲作支援を行ってきたのです。

一九九二年、私は西アフリカのコートジボワ

ールに、稲作機械訓練プロジェクトの稲作専門家として赴任しました。西アフリカ稲作開発協会（WARDA）に挨拶に行ったとき、モンテジョーンズ博士から、アフリカイネとアジアイネの種間交雑から稔実籼を得ることに成功した稲穂を見せてもらいました。これが後に「ネリカ」と名付けられる稲との運命的な出会いです。実際にこの稲を栽培してみても、アフリカの稲作はネリカが主役になると確信しました。

ネリカの普及 ゼロからのスタート

ネリカとの出会いから十年以上経過した二〇〇三〜四年、アフリカ東南部七か国で、稲の栽培が可能な場所の調査を行い、ネリカ普及の拠点をウガンダに決めました。赤道直下の国ですが、標高が高いため年間を通して最低気温十八度、最高気温二十八度、年間雨量千三百ミリと、一年中稲の栽培が可能で、常に圃場試験が行える条件が揃っているためです。

二〇〇四年、私はネリカ普及専門家としてウガンダ国立作物資源研究所に赴任。当時の研究所には稲の研究者はゼロでした。まず稲研究部を立ち上げ、二人の研究助手と研究・普及を始めました。アフリカ東南部に派遣されたネリカ専門家は私だけだったので、十か国を担当し、

出張しながら各国を指導しました。

ネリカについて改めて説明しましょう。ネリカは「New Rice for Africa」を略して名付けられました。陸稲で畑に直播きするので水田も苗作りも田植えも必要ありません。生育期間が百〜百三十日と短く、病害抵抗性があり、在来の陸稲品種に比べて早耐性が高く、収量も高い。過湿障害で作物が作れない低湿地でも栽培できるなど、多くの利点があります。しかしアフリカの農家は、稲が畑でも栽培できることを知りません。陸稲の存在を知らないのです。そこでネリカを多くの農家に知ってもらうため



ウガンダにスーダンの普及員を招いて稲作研修を行う坪井さん（中央）

に、ウガンダ各地の村で活動している青年海外協力隊員に手伝ってもらうことにしました。隊員のほとんどは農業経験がないので、まずネリカ栽培の研修を行い、種籾を持ち帰って村で農家と一緒に栽培してもらうことにしました。このプロジェクトに協力してくれる隊員を「ネリカ隊員」と呼ぶことにしました。

ネリカ隊員の活躍は期待以上でした。稲作が全く行われていなかった地域で隊員がネリカ栽培を指導し、今では大稲作地帯となっています。またネリカ隊員ばかりでなく青年海外協力隊の教師隊員も、学校の畑（アフリカの小学校には実習用の畑がある）で生徒と一緒にネリカを栽培し種籾を持ち帰り、生徒の親にも栽培方法を教えました。他のアフリカ諸国に派遣されている青年海外協力隊員にも、ウガンダに来てもらい、一週間の研修を行いました。

昨年までにウガンダで百三十人、他のアフリカ諸国で百七十人のネリカ隊員が活動してくれました。帰国したネリカ隊員の三十名以上が、現在もJICAの専門家やコンサルタントとしてアフリカで活躍しています。

私も、普及員と農家を対象に研修を数多く実施しました。研修終了後に農家に種子を一キログラム供与し、栽培して五十キログラムに増やしてもらい、その中から二キログラムを近隣の



小学校の畑でネリカの種まき

農家に無償で提供する約束をして、ネリカ農家を増やす活動を続けました。

活動は確実に実を結び、ウガンダではネリカ普及前の二〇〇三年には陸稲面積千五百ヘクタールでしたが、二〇一七年には七万ヘクタール以上に増えました。その他のアフリカ諸国でも、ネリカ栽培面積は拡大しています。

アフリカの農家の多くは豊かな収入を得ているわけではありません。しかし、ネリカを栽培している農家では現金収入を得られるようになり、「子どもを学校に通わせることができ」「屋根を茅葺きからトタンにして、雨漏りがなくなった」「自転車を買った」という声が聞か

れるようになりました。ネリカから得られる現金収入がアフリカの農家の生活向上に貢献していると確信しています。

二〇〇八年、JICAはサブサハラ（サハラ砂漠以南）アフリカのコメ生産を十年で倍増させるための「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD）」を立ち上げ、昨年コメ生産倍増を達成しました。

今年八月に開催される東京アフリカ開発会議（TICAD7）では、二〇三〇年までにコメ生産をさらに倍増する「CARDIIプロジェクト」を開始します。アフリカ大陸の人口増加は著しく、二〇一五年に約十二億だった人口が、二〇五〇年には約二十五億、二一〇〇年には約四十四億に達するだろうと、国連は予測しています。増加する人口の食糧問題対策としては、いまだ利用されていない低湿地での稲作が切り札となります。そのためにはさらに多くの農家に稲作を広める必要があります。稲作専門家とネリカ隊員の現場での活動の継続が今後も欠かせません。

五十年後のアフリカの食卓にもお米が並ぶように

青年海外協力隊から始まった私の海外生活も、三十二年が経過しました。アフリカ諸国のネリカ栽培は順調に拡大し、ネリカ隊員が各国

で活躍し、若手の稲作専門家も育ちました。

私は長期間現地に滞在して技術を教える「長期専門家」からの引退を決め、二〇一四年、十年滞在したウガンダから帰国しました。帰国前にFAO（国連食糧農業機関）とウガンダ政府から「FOOD HERO」賞を、帰国後に「第三回食の新潟国際賞」を授与され、大学時代の食糧問題研究会から始まった私の国際協力も、一つの節目を迎えました。

二〇一五年からは、一か月程度現地に滞在して稲作技術を教える「短期専門家」として、ウガンダ、ザンビア、エチオピア、エジプトに計二十一回出張し、研修の講師、専門家やネリカ隊員の活動現場を訪れ、助言をしています。

アフリカ稲作支援を二十五年行ってきましたが、まだ道半ばであると感じています。いまやアフリカの大都市にはショッピングモールがあり、スマートフォンも普及していますが、郊外の村では、子どもたちは裸足で駆け回り、農家には耕運機もなくいまだに鋤で耕している状況が続いています。五十年後アフリカの家族が食事をしながら「こうしてお米が食べられるのは、昔日本人が稲作を教えてくれたからだよ」と語り継がれれば……と思いつつ、もうしばらくアフリカ行きを続けるつもりです。

（つばい たつし）

道徳授業私の実践

鹿児島大学教育学部附属小学校
複式指導部

複式学級における子どもたちの学び

— 少人数スタイルから見えてきた課題を基に —

本校のある鹿児島県は、全小学校数の約四六パーセントが複式学級を有しており、割合では全国一である。そんな鹿児島県において、複式指導の充実は全教員に求められる要件とも言える。複式指導では、一般的に国語科や算数科の授業において、直接指導や間接指導を通して、授業を構成する。平成三十年から実施された「特別の教科 道徳」（以下道徳科）においては、多くの学校が複式指導のスタイルではなく、A年度B年度といった連続する二つの学年を統合した少人数スタイルで実践している。

そこで、少人数で行う道徳科授業において、鹿児島県の先生方から寄せられた課題を基に、それらに対する解決方法について、考察してみたい。

少人数における課題

○多様な考えが出づらく、教師主導に陥ったり、ねらいを達成できなかつたりする。↓道徳科目標に示されている学習活動を具体化しづらい。
○各学校の実態が異なるため、授業作りの課題が様々であり、共有されづらい。↓一人学級や、高学年一人と

実践を基にした課題解決の方向性

南九州市立松原小学校（高学年複式）の子どもたち四名と実践した授業を通して見いだした、主に前述二つの課題解決の方向性をまとめる。
【児童数】
六年生二名、五年生二名、計四名
【授業内容】

○内容項目 A 正直・誠実

○教材名「のりづけされた詩」（『みんなの道徳 6年』学研）

●方向性① ねらいを明確にする

※資質・能力の三つの柱に関連付け、ねらいを設定する。

●方向性② 発問と学習の様相を想定する。

○ねらいに迫るために構成した二つの発問と揭示の工夫

【発問①】

「主人公はどんな顔をしているだろう。」

※場面絵を掲示せず主人公の表情を予想させ、正直に行動した後の心情について、それぞれの考えの違いを明確にさせる。

【実際】

C1、C2 ↓ 六年生

C3、C4 ↓ 五年生

T…主人公はどんな顔をしているのだろうか。ううね。

C1…ううん。

C2…にこっとしていると思う。

C1、C3…ううん。

T…なぜにこっとしていると思うの。

C2…正直に言ったら明るくなれるかなあと思う。

- T…C3くん、表情はこんな感じ（明るく晴れ晴れ）じゃないの。
- C3…う〜ん。
- T…C2くんが言ったみたいにも明るい表情だと思う人？
- C2…（挙手）
- C1、C3、C4…（保留）
- C2…正直に言えたから明るくなる。
- C3、C4…う〜ん。
- ※六年生児童が、ガイド学習で身に付けた問い返しを五年生児童に実施。
- C2…暗い感じなの？ 明るい感じなの？ どっちだと思う。
- C3…う〜ん。
- C2…じゃあこの間だどどの辺？（両手を縦に広げて五年生児童に対してどの程度か問う）
- C3…真ん中くらい。
- C2…真顔？
- C1…じゃあ、なんで真ん中なの？
- C3、C4………。
- T…暗い表情ではないの？
- C3…暗くはない。う〜ん。
- T…C2くんの考えとは違うの？
- T…（場面絵を掲示し、C2へ）予想とどうだった？
- C2…違った。明るい顔ではなかった。

【発問①の指導上の留意点】

少人数学級における特性を生かす視点から左記のA、Iを指導者が配慮し、授業を構成する。

A 一人一人の思考の時間を十分に確保する。

I 個に応じた指導を図る。

【分析】

具体的には、児童が悩んでいる際には補助発問等を行わず、悩む時間を確保する。また、C2児童が発した上記太字部分などは、子ども同士の学び合いをうながし思考の場が確保され、学びが深まる。単式学級でも同じだが、指導者側が学びの様相を適切に判断し、できるだけ介入をしないことで、子どもたちの資質・能力を育成する学びを具現化できると考える。

【発問②】

「正直に言えば明るくなれるのではないか。」

※正直に言うことで明るくなると考えたC2児童の考えや主人公（和江）の表情を基に、「正直な行動」「誠実さ」「明るく生活すること」についての考えを深めさせる。

【実際】

T…（C2へ）表情はどうだった？

C2…予想外。

T…正直に言ったら明るくなれないのかなあ。

C1…むしろ後悔の方が……。

C3…う〜ん。

※本時のねらいに関わる部分であるため、上記Aに留意し、書く時間を設定し、考えをまとめさせる。

C2記入内容「正直に言えたけれど、最初のときにずるをしなければよかった。」

C1記入内容「詩集を見つけなければよかった後悔の気持ち。」

C3記入内容「正直に言うことはできたが、ずるしてしまう気持ちがなぜでしまったのか後悔が残る。」

※以上の子どもたちのまとめから、正直に生きると明るく生活できるといふことや、誠実に生きるとは、後悔するような行為を行わないことであるといった道徳的価値観が明確になった。

【発問②の指導上の留意点】

A ねらいに迫らせるための活動を具体化する。↓ボードに記入させたりボードを基に話し合わせたりする。

I 交流した内容を類型化し、それらを基にまとめる時間を確保する。

※少人数であるが故に、まとめきれないことを負担に感じてしまう子どももいる。その際は、学んだ中でよかったと思うところや、参考になった友達の考えを書かせる。少人数であるからこそ、ゆとりある関わりが大切である。

おわりに

少人数での道徳科授業を行う際に大切にすべきことは、やはり価値分析や児童分析、教材分析を基にした学習内容の設定である。その点は、共通している。そして、少人数であるよさを理解し、子どもたちの思考時間を十分確保する指導方法を工夫し、沈黙を楽しむための指導観をもつ必要がある。

教師が問い、子どもが答えるTCCTCCTCというような授業は、子どもの学びを阻害し、資質・能力、つまり道徳性の育成にはつながらない。

「授業の成立ではなく、子どもたちの学びの成立」。本校で大切にしているこの言葉を最後に示したい。

道徳授業私の実践

東京都中野区立塔山小学校
指導教諭
幸阪 芽吹

小・中学校で連携して行う道徳授業

～ティーム・ティーチングを利用して～

はじめに

本校は、小中連携の取り組みの一つとして小学校教諭が中学校で授業する「乗り入れ道徳授業」を行っている。本実践は、その中の一つである。小学校と中学校の教員がともに教材開発をし、ティーム・ティーチングで授業を行ったものである。

○学びを深めるために
生徒たちが自分との関わりでより考
えを深めることができるよう、社会科
と道徳科の二時間をつなげて授業を行

うことにした。

第一時では、社会科で当時の時代背景も含めた人種差別について、第二時では、社会科で学んだことをもとに、道徳科で「公正、公平、社会正義」について学習した。

また、生徒たちが「差別」についての程度の意識があるのか、事前アンケートを実施し、実態を把握した。

授業の実際

○対象 中学校一年生
○主題名

誰に対しても分け隔てなく

○内容項目 公正、公平、社会正義

○教材名

「キング牧師とローザ・パークス
～黒人の平等な権利を求めて～」
(汐文社)

○ねらい

正義と公正を重んじ、差別や偏見のない社会の実現に努めようとする心情を育てる。

○教材について

アメリカ南部の町では、黒人と白人はバスの座席に並んで座れなかった。黒人女性ローザ・パークスは、白人の

席に座り、逮捕されてしまう。これに黒人たちが抗議し、バスのボイコット運動へと発展した。それを中心となって指導したのが、若き日のキング牧師だった。

《導入》(T1・中学校教師)

《発問》どのような差別があるだろう。

事前に行ったアンケートの結果を紹介した。いちばん多かったのは「人種差別」であり、他には、男女差別などが挙げられていることを伝えた。そして本時では、人種差別について考えることを確かめた。

《展開》

本時の教材である絵本を、プレゼンテーションソフトを活用してモニターに映した。その際、範読は小学校教師が、機械操作は中学校教師が行った。

《発問》ローザ・パークスは、どのような思いで白人に対して「席を譲らない」と断ったのだろう。(T1・小学校教師)

- ・人種差別があったとしても、自分は黒人を下と思っていない。
- ・自分が態度で表すことで、差別がなくなればいい。
- ・自分の行動によって、他の黒人が白



人に対して、差別に抗議する気持ちが芽生え、戦ってくれる。

話し合いを通して、ローザの行動は、「差別」について周りの人たちに訴える思いによるものではないかという意見が多かった。

そこで教師からさらに「怖い思いはなかったか」と問いかけた。すると「怖いという思いは少しはあったと思うが、それ以上に自分の行動で世界が変わってほしいという思いのほうが大きかった」という意見が出た。

〔発問〕キング牧師はバスのボイコット運動を、どのような思いで呼びかけたのだろうか。(T1・小学校教師)

・黒人みんなで協力して、一日でも早く差別をなくしたい。

・ローザの行動を通して、改めて黒人や白人にこのままでいいのかということを考えてほしい。

ここでは、キング牧師の「差別をなくしたい」という思いの強さを全体で

押さえ、さらに、三百八十二日間歩き続けた黒人たちの思いを問うた。

・歩くのはつらいけれど、これで未来が変わるなら。

・自分の体がぼろぼろになっても、今頑張って未来をよくしたい。

・自分たちが行動した結果がこれからにつながれば。

生徒たちには、「差別をなくしたい」という思いに加え、「つらいけれどこれからつながれば」という「未来への願い」という視点も含まれていた。

〔発問〕バスのボイコット運動で歩いている人たちは、差別がなくなると思っていたか。(T1・小学校教師)

四百日近く歩き続ける中で、黒人たちは、「差別がなくなると思っていたか」「思っていなかったか」という視点で問いかけた。

生徒たちは自分の名前の入ったマグネットを使って自分の思いを黒板に示した。

〔なくならない〕

・今がいちばんつらい。変わるかわかわらないかよりも、今はただやってみる。

・なくなるとは思っていない。でも、

少しでも改善したい。

〔真ん中〕

・なくなるかどうかはわからない。でも少しでも可能性があるなら、自分は行動したい。

〔なくなる〕

・なくなるという希望をもっていた。
・キング牧師が行動を起こした。みんなと一緒に頑張れば、きっとよくなる。きっと大丈夫と信じていた。



〔ボイコット運動〕の裏には、黒人一人一人のさまざまな思いがあり、それが支えとなって行動していたことを、改めて考えることができた。

「バスのボイコット運動」が起きた後、差別をなくす法律がつくられ、アメリカでは黒人の大統領も生まれたこ

とを伝えた。

〔発問〕あなたは差別とどのように向き合っているか。(T1・中学校教師)
ここまでの授業から、自分の生活をもとに考えさせるため、ワークシートを活用した。

《終末》

ノーベル平和賞を受賞し、教育の平等な権利を求めて現在も活動している「マララ・ユスフザイ」の言葉を紹介した。

おわりに

小・中学校でティーム・ティーチングで授業を行うことで、互いに道徳授業について話し合い、九年間のねらいの系統性を意識することができた。また、「公正、公平、社会正義」を扱うにあたり、中学生だからこそ、小学生よりも深い話し合いができ、それぞれの考えも発展することを感じた。

中学校での教科化に向けて、今後小・中学校とのつながりを大切にしながら、ともに確実に授業を行っていき

(二)うさか めぶき)

道徳授業私の実践

東京学芸大学附属世田谷中学校
教諭
秋山 寿彦

道徳の学びを主体的に発信する

中学生の育成く伝統と文化の尊重

中学生の伝統と文化の尊重 に対する意識と教育課程

教科書を活用した道徳の授業を学校行事との連携を図り学びを深めていくとき、生徒の心にとどのような成長と変容が生まれたかということを見視化することが重要である。そこで、新聞各社の意見投稿欄への発信を奨励している。今回は、中学校学習指導要領（平成二十九年改訂）解説総則編において示されている「郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさについ

て理解を深め、それらを育んできた我が国や郷土を愛するとともに、国際的視野に立って、他国の生活習慣や文化を尊重する態度を養うこと」をねらいとする道徳科の学習を充実させることと中学生にとって、日本の伝統と文化について日常生活の中で必要性を意識する場面はそれほど多くない。前任の東京学芸大学附属国際中等教育学校で、これまでに海外への留学・交流を経験した多くの生徒が「学校やコミュニティで日本のことを質問されて困ってしまった。」「自分の国である日本の文化

や伝統を海外の友人に尋ねられたときに戸惑ってしまい、ちゃんと伝えることができなかった。」と口にしていた。伝統と文化の尊重に関する学習に取り組む際は、各学校の教育活動の特色を示した「学びの地図」（カリキュラムマップ）を作成し、計画的系統的な学習が求められる。実践事例①人間国宝・山本東次郎さんを迎えての狂言鑑賞教室
中学一年生が会おう外国人狂言師を取り上げた教材「日本の心と技」（学研『中学生の道徳 一年』）に、多く

の生徒が、「狂言が外国の人の心をつかむことに驚いた。なぜなのだろうか。」「私たち日本の中学生は実際に触れる機会が少ない狂言に、外国の人が興味をもって入門し、修行することはすごいことなのかもしれないが、自分にはピンとこない。」という素朴な感想を寄せた。

東京学芸大学附属世田谷中学校では約四十年前から三年に一度、人間国宝、山本東次郎さんたちを迎えて狂言教室を実施している。山本東次郎さんは、教科書に出ているオンジェイさんと同じ、大蔵流という流派に属している。狂言鑑賞後に、山本東次郎さんによる講演と質疑応答が行われ、生徒から質問が出された。

生徒・東次郎先生は、子どものころから代々受け継いできた芸を習ったと話されましたが、身内だけで受け継いでいくのでは、将来、狂言は減びてしまうのではありませんか。

東次郎さん・今日、二つの狂言を演じた演者の中には、学校を卒業してから狂言師を目指した人もいます。伝統を受け継いでいくために、これからは日本人だけではなく、外国人であって

も受け入れる時代になってきています。

生徒たちは山本さんと直接話すことで、伝統文化をより身近に感じることができた。

新聞の投書の活用

山本東次郎さんとの学びに関して、多くの生徒が意見投書を行い、新聞でも紹介された。一部を紹介する。

「山本東次郎さんは『今の舞台やドラマと違って、狂言は刺激を与えない芸能だ』とおっしゃった。狂言は大きな音や大がかりな装置は使わないが、それでも内容が伝わってくる。そして、おもしろい。現在の芸能は刺激を求めすぎているのではないだろうか。」

授業では狂言の魅力にピンとこなかった生徒たちであったが、投書から山本さんの「刺激」という言葉に着目して、伝統芸能である狂言と現代の芸能を相対化してとらえ、二十世紀を生きていく手がかりを見いだそうとする生徒の姿を読み取ることができた。

実践事例② 修学旅行の事前学習

修学旅行は、生徒にとって中学校生活の中でもひととき大きな意味をもつ学校行事である。毎年三年生の四月に京都・奈良を目的地として修学旅行を実施しており、日本の伝統と文化を体感する事前学習に、二年生の十二月から取り組んでいる。

金閣寺を取り上げた教材「金閣再建 黄金天井に挑む」(学研「中学生の道徳二年」)を、修学旅行の事前学習の導入と位置づけた。多くの人々が愛する国宝を修復する職人の工夫と努力が、今日まで伝統と文化を支える力となっていることに気付いたのち、見学地向かわせたいと考えた。

同時に、修学旅行に参加する中学生は寺院や仏像という文化財だけに興味や関心を向けている訳ではない。古都の歴史的景観・食べ物・伝統工芸体験・写経や法話体験等にも目を向けた、広い視点からわが国の伝統や文化という価値をとらえて修学旅行の計画を検討することが求められる。京都や明日香村の景観の中に「伝統と文化」を見いだし、そこで生活し、修学旅行生として訪れた自分たちを温かく迎え入れてくれたことに対する感謝を伝え

たいという気持ちから、自分で投書先を調べ、京都の地方紙に投稿した作文を紹介する。東京ではなかなか意識する機会がない「和」に着目している。

「散策中、コンビニやカフェなどのチェーン店の看板が和の景色に溶け込んだ色になっていることに驚きました。京都の和の景色は、昔から守り継がれた、とても貴重なものだと感じました。京都ではたくさんの人に出会いました。皆さんとても親切で、優しい方々でした。京都は景観や食べ物だけではなく、住んでいる人々の心も「和」だと感じました。私の住む東京では、「和」をあまり身近に感じられませんが、日本人として、「和」の文化が根付いている京都は、とてもすばらしく、誇りに思いました。」

東京を中心に生活し、学ぶ中学生にとって修学旅行で京都、奈良を訪ねる学習は、「伝統と文化」に関して新しい発見に満ちている。

修学旅行を終え、薬師寺金堂に対する感動が表現された生徒の意見が新聞の投書欄に掲載された。

「修学旅行で京都、奈良に行った。貴重な文化財に触れ、さまざまな角度

から歴史をたどることができた。一番心に残っているのは薬師寺の風景だ。数十年前、残っていた建物は東塔のみだった。そこから金堂、西塔を復興し、一千三百年前の創建当時の薬師寺を甦らせたのが、『日本一の宮大工』とも呼ばれた西岡常一さんだ。僕は、彼のことを学校の授業で知った。不可能とも言われた金堂の復元をやり遂げるため、どんな苦勞も惜しまなかった。自分の信念を守るために必死になれる。そんな姿がかっこよかった。」

新聞への投書のほかに、生徒の内面、心情の変化を可視化する活動として、道徳の授業での学びを修学旅行で深めた上で、さらに美術科と連携を図った。修学旅行期間中に生徒が撮影した写真から、「伝統と文化」につながるコラーージュ作品を作成、表現、展示、相互鑑賞する活動を取り入れたのである。自分が撮影した多くの写真から「伝統と文化」という視点で選び、切り抜き、「再構成」する活動を通して、自分なりに考えを深めた「伝統と文化」を視覚的に表現する作品は興味深いものであった。

(あきやま としひこ)

道徳授業私の実践

愛知県あま市立七宝小学校
 (前 愛西市立八開中学校) 教諭
鈴木 賢一

道徳こそ、

カリキュラム・マネジメントを生かそう

はじめに

カリキュラム・マネジメントを難しく大変なものと考え、二の足を踏んでいた私だが、その有効性に強く魅せられた忘れられない実践がある。

前任校では、中学二年時に保健的行事「命の授業」を行っていた。これは、市保健センターの協力のもと、生徒が触れ合う機会をもつというものであり、教科書では学べない、命の力・温かさを肌で感じられるすばらしい行事であった。

あるとき、養護教諭からこの行事を系統的に発展させたいという相談を受けた。そこで私は、この行事に道徳授業、さらには理科や保健体育科、家庭科などの学習をつなげ、多様な考えを交流させることを提案した。生命とは何か、その尊さを守るためにはどのようなことを考へたらよいかなど、生命尊重への学びをより深めることができることを考えたのである。

道徳・行事・教科をつなげて

D「生命の尊さ」を柱にして、行事

の内容に合うような道徳教材と各教科の単元を以下の表のように配置した。時期的な問題に配慮しながら、無理のない範囲で行えるよう工夫した。実際に行ってみると、各教科で培った知識をもとに、体験を踏まえて行った道徳授業は、生徒たちの目の輝きがまるで違うことに驚かされた。

授業の実際 (一年生)

保健的行事「命の授業」と道徳授業をセットにして、二時間連続で行った実践を紹介する。

	1年生	2年生	3年生
道徳授業	「あなたに」 D 生命の尊さ	「あなたはすごい力で生まれてきた」 D 生命の尊さ	「テーブルの卵焼き」 C 家族愛
保健的行事	「妊婦さんの話を聞こう&妊婦体験」	「出産された方の話を聞こう&赤ちゃんに触れ合おう」	「1年後の再会～赤ちゃんの成長を感じよう～」
教科	「保健・体育」 心身の発達と心の健康	「理科」 動物の生活と生物の変遷	「家庭科」 オリジナルおもちゃを作ろう



【2年生 命の授業】

まず、「命の授業」では、出産を約

一か月後に控えた妊婦さんに来ていた
 だき、「今どのような気持ちか」「日常
 生活を送る上で大変なことは何か」な
 どのお話を聞いた。その後、約七キロ

グラムのお重さがある妊婦スーツを着用
 し、足元にある
 物を拾ったり、

寝返りをうった
 りするなどの体
 験を行った。生
 徒たちは、妊婦
 さんが些細なこ
 とにとっても苦勞することを知った。そ
 れでも妊婦さんが「それも母親になる
 ために必要なこと。おなかの赤ちゃん
 のために頑張らなきゃ。」と言ってい
 るのを聞き、「母親になるってことは、
 とても誇らしく、幸せなことなんだ。」
 という感想をもった。



徳 かけがえのないきみだから 2
 年「学研」

○ねらい 生命あるものは互いに支え
 合って生き、生かされていることに
 気付き、そのことに感謝の念をもっ
 て生きていこうとする態度を育てる。

【導入】 事前アンケートから、①自分
 が生まれたときの様子、②名前にこめ
 られた思いを数名に発表してもらい、
 本時のテーマ「家族の愛を受けて、自
 分はどう生きていくか」につなげてい
 った。

【展開】 発問① 「あなた」の誕生に
 は、誰のどのような思いがこめられて
 いたのだろうか。

教材を読んだ後、この発問をする
 と、「母からの『生まれてきてくれて
 ありがとう』という感謝の思い」「父
 からの『これから元気で精一杯生きて
 ほしい』という願い」「祖父母からも



期待や希望
 があったと
 思う」など
 の意見があ
 った。ど
 の意見も登
 場人物の

「あなた」ではなく、「自分」の誕生に
 思いをはせ、両親や親族が自分の誕生
 をどれほど待ち望み、喜び祝福してく
 れたかを考えることができた。

発問② 手紙を読む前と読んだ後で、
 「あなた」の何がどう変わるだろう。

一人の生徒が「自分の命を今まで以
 上に大切に生きる。」と言ったことから
 「親のおかげで、自分が生きていられ
 る。」「自分の命は親の命とつながって
 いる。」など、考えに広がり生まれ
 ていった。そんな中、さらに別の生徒
 が「私は今、家族とあまりしゃべりま
 せん。うちの親はいつも忙しそうなの
 で、なるべく迷惑をかけないようにし
 ようと思っていたけれど、これからは
 少し親を頼ってみてもいいかなと思
 いました。」と語った。家族との関係を

見つめ直し素直になれない自分を受け
 止め、それでも家族とのつながりを大
 切に生きようとする思いが感じられた。

【終末】 振り返りでは、「家族の愛に
 感謝しながら生きることは難しいけれ
 ど、やはり大切だと思った。」「親を喜
 ばせたいという気持ちが強くなった。」「
 自分の輝いている姿を見せたい。」「
 今すぐにはできなくても、大人にな

ったら恩返しをしたい。」などといっ
 た意見が発表された。本時の授業のみ
 ならず、保健的行事での体験やその前
 に行った保健体育の授業があったから
 こそ、たどり着いた考えであろう。

最後に、授業に参加してくださった
 保健師さんや助産師さん、妊婦さんに
 話を聞いた。「親は、子どもに自立し
 てほしいと願いながらも、もっと迷惑
 をかけてほしいとも思っているもので
 す。毎日パパママしながらも、子ども
 がいるから生き生きと生きられる。そ
 ういう意味では、親も子どもに生かさ
 れているのですね。」

命が互いに支え合い、生かされてい
 ることを知った生徒たちは、感謝の念
 を強くもったに違いない。

おわりに

今回の実践は、他教科の先生、養護
 教諭、あるいは外部の大人も交えて共
 に悩み、考える授業となる点において
 も非常に有効であった。まさに道徳こ
 そ、カリキュラム・マネジメントの効
 果が存分に発揮される。そう強く感じ
 た実践となった。(すずき けんいち)

- 主題名 互いに生かされる命
- 内容項目 D 生命の尊さ
- 教材名 「あなたに」(『中学生の道

どうなるこれからの道徳授業

保護者対応編



とくちゃん

監修・法政大学
キャリアデザイン学部兼任講師 廣瀬仁郎先生

マンガ・のはらあこ

「道徳の時間」はこれまで教科外の位置づけでしたが、特別の教科として教科枠に位置づけられました。具体的にどうなるかというところ…

① 授業で検定教科書が用いられるようになります。一定の教育水準が保証されることになります。

② 指導要録や通知表で評価が行われるようになります。達成度評価や絶対評価ではなく、個人内評価として、記述することになります。

小学校では昨年四月に教科になりましたね。大きく変わったのは次の二点といえます。

II 授業参観 II

先生！

道徳の授業を見て、教科になる前の授業と大きな違いがないように思えるのですが、何がどう変わったんでしょうか。

「道徳の時間」は、新しい時代にあわせて質の高い「授業」へとバージョンアップを図っています。

キーワードは、「考え、議論する道徳」です。子どもたちの問題意識を高め、主体的・対話的に深く考える授業を目指していきます。

また、道徳の問題は、学校生活だけでなく家庭や地域社会の中にも存在します。時には子どもたちが道徳科で気付いたこと、疑問に思ったこと、学んだことを再度、ご家庭で話題にしていただけとうれしいです。

四月から中学校でも教科になったね。

なるほど！

道徳ジャーナル101号

令和元年5月発行

発行所 株式会社 学研教育みらい 発行人 甲原 洋／編集人 木村友一

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部(〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8)

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

URL <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp> ●「道徳ジャーナル」は左記ホームページでもご覧いただけます。電子版(iOS, Android用)は「学研ブックビヨンド」から。

9300006532